

花き流通標準化検討会（第4回）概要

1. 日時：

令和5年3月24日(金) 16:00～18:00

2. 場所：

オンライン

3. 出席者：

<委員>

福永 哲也	豊明花き（株）	代表取締役社長
田嶋 久嗣	札幌花き園芸（株）	代表取締役社長
赤上 信弥	公益社団法人全日本トラック協会	常任理事
小島 直康	全国農業協同組合連合会埼玉県本部	花植木事務所長
北川 真光	愛知県経済農業協同組合連合会	園芸部花き課長

<行政>

武田 祐紀	農林水産省	大臣官房新事業・食品産業部食品流通課長
丹菊 直子	農林水産省	大臣官房新事業・食品産業部食品流通課 卸売市場室長
小宮 英稔	農林水産省	農産局園芸作物課花き産業・施設園芸振興室長
吉田健一郎	農林水産省	農産局園芸作物課花き産業・施設園芸振興室 課長補佐

<オブザーバー>

中嶋 強	(株) 仙花	代表取締役社長
大西 常裕	(株) なにわ花いちば	代表取締役社長
真鍋 光裕	一般社団法人日本花き生産協会	流通委員会委員長
秋山 義郎	全国農業協同組合連合会	経営企画部物流対策課 課長
前田 安正	一般社団法人日本花き卸売市場協会	常務理事
桐生 進	株式会社大田花き花の生活研究所	所長
小野 和洋	国土交通省総合政策局物流政策課	主査
福島 慎也	経済産業省商務・サービスグループ物流企画室	係長

4. 議事概要：

<行政から、花き流通標準化について（資料3）及び花き流通標準化ガイドライン・残課題（資料4）について説明後、意見交換>

【各構成員からの主な意見】

○以下、構成員からの主な発言。

1. 総論

- 関係者によって標準化の背景理解に差があるので、今後周知を行うなかで、ガイドライン策定の意味合いの再認識を行い、産地や生産者団体とその普及員や、卸・仲卸売業者、国、都道府県等で共通認識を持つことが必要。一部コストアップになる部分はあるが、それでもやらなければならないと

感じている。ガイドラインの策定が終わりではなく、ここからがスタートだと思う。

- ・ ガイドラインとは別にガイドラインの説明書が必要と感じる。例えば、何故1100mm×1100mmサイズのパレットを基準とするかといった説明が必要。
- ・ 産地側、市場側、それぞれに事情がある。進めていくうえで新たな課題も出てくると思うが、細かくコミュニケーションを取りながら対処していければよいと思う。
- ・ 標準化は全体的に統一化を図る部分と、品目に応じた特性を反映していく部分の両面から進める必要があると感じている。
- ・ 今回のガイドラインでは台車、パレット、外装、コード情報と一様に方向性を示したが、実際議論をしていればこれらは順に検討となるもので、今般流通上の実害が出る前に、先回りをしてガイドライン化したことになる。理解を得るには時間がかかるかもしれないが、国には関係者への粘り強い説明をお願いしたい。
- ・ まずは市場協会の実証実験結果をベースに7月から検討を重ねたこのガイドラインで、必要に応じて今後の肉付けも視野に入れながら動かしていくと考えている。

2. 台車及びパレット

- ・ 生産者として、決められたガイドラインにはできるだけ協力するが、パレット化・台車化を行う産地の出荷拠点はどこにするのかなど、課題はまだある。
- ・ パレットの使用は労働時間の短縮や手荷役解消に有効である一方で、現状花きの物流上ではほとんど使用されていない。また、自社計算により積載率が2～3割減少すると考えられることから、そのコスト負担、パレット積載は誰が行うのかが課題。関係者が加わって実証実験を重ねることが必要と思う。

3. 外装サイズ

- ・ 花きは品目特性があり流通の違いも色濃く出るため、大箱の方が物流コストは安く抑えられる一方で、市場の買手側がどの程度の入数を望んでいるのか品目ごとに意見交換する必要があると感じている。
- ・ 段ボールサイズの統一は品目によっては難しいと感じる。「一箱に何本入る箱」という整理もガイドライン上でしてもらえるとよいと思う。
- ・ 記載の積み付けパターンでは荷崩れが懸念される。かといってストレッチフィルムを巻いた場合にも蒸れによって箱が潰れてしまわないか不安。関係者同士で実証実験を行う必要があると思う。

4. その他

- ・ 産地から市場までの運賃はこれまでは生産者が負担していたが、標準化によるコストアップまで全て負担するとなると苦しいので、コスト問題をどうするかという点でもできれば考えてもらいたい。
- ・ 増加するコストだけでなく、標準化や効率化を行うことで減少するコストがあるのもまた事実。トータルのコストで見ながら考えていくということが必要だろう。
- ・ 産地としては、自分の育てた花がよい状態で消費者に届くことを望んでいる。しかし出荷した花が東京の市場を経由して、産地からほど近い販売店に再びUターン出荷されるという非効率な流通が発生している実態がある。出荷前に出荷先の情報が分かれば輸送経路を再考する余地もあるので、

流通の多様化を考えてもらいたい。

- JA での積み込みの待ち時間が長いケースが多く、彼らの意識改革も必要。一部の JA では前日集荷、翌日出荷を目指して動いているが、大半は当日にならないと出荷量が決まらない現状にある。
- 2024 年問題を追い風にして輸送コストが上がっていくのは常とし、今後は如何にして既存の運賃に近づけていくかを考えていくべき。共同輸送体制の構築も念頭に、物を運ぶことのみを重視するのではなく、サプライチェーンが維持できるよう物流業界での“協調”していく必要がある。
- 昨年当社が調べたところ、市場に搬入した 4 t トラック、10 t トラックのうち、積載率 50% 以下のトラックが全体の 5 割を占めていた。これは輸送トラックが満載できなくなっている現状を示しており、中継輸送や共同輸送を検討・導入して、今後増加する輸送コストを少しでも吸収していかなければいけない。

(以上)